

2019・2020

2019 (平成31) 年4月1日～2020 (令和2) 年3月31日

新しいふるさとづくり。 復興の種が芽吹く

持続可能なまちづくりを目指して



新しく設置された街路灯「THE REBORN LIGHT」

復興と創生の動きが加速

2019 (平成31) 年3月18日、幸せを運ぶコウノトリを模したというS字型の街路灯に明かりが灯ると、点灯式に集まった国道114号沿いの住民をはじめとする関係者から一斉に喜びの声が上がりました。街路灯の名前は「THE REBORN LIGHT (ザ リボーン ライト)」。自然エネルギー発電照明システムなどを手掛けるMIRAI-LABO株式会社が開発・製造したものです。太陽光で発電したエネルギーを蓄電し、電源や電線を使わず点灯できる独立電源街路灯で、町の復興再生を印象づけるものとなりました。

この年、町は東日本大震災および原発事故から9年目。一部地域を除く避難指示解除から3年目にあたり、町が

目指す「復興」と「創生」がようやく形になってきました。幾世橋地区では、2019 (令和元) 年5月26日に、町民の交流の拠点となる交流・情報発信拠点「(仮称) 道の駅なみえ」の起工式が開催され、来賓・関係者など約70人が出席しました。また、帰還した町民からの要望が強かったスーパーマーケットとして「イオン浪江店」が7月14日にオープンし、町内で生鮮食品や日用品などを購入できるようになりました。運営を行うイオンリテール株式会社と町は、災害時における支援協力協定を締結。災害が発生、または発生するおそれがある場合は、食料、飲料水、生活物資などの調達、店舗における水道水、トイレ等の提供、災害情報の提供などの協力態勢が敷かれ



「(仮称) 道の駅なみえ」起工式での町長式辞



道の駅なみえ (国道6号からの外観イメージ図)



関係者による鎮入れ



イオン浪江店オープン

ることになります。

漁業については、整備を進めていた請戸漁港の荷捌き施設、貯水冷凍庫施設、海水取水ポンプ施設、上架施設が完成し、水産加工団地では第1号立地企業となる「有限会社 柴栄水産」の加工場建設工事がスタートしました。

農業の再生では、酒田、北棚塩、苧宿、藤橋、立野、北幾世橋の6地区で水稻作付が行われました。その面積は、前年度の約4倍になる27.2haに拡張し、野菜類、花き類の作付も前年度比2倍となるなど、大幅な伸長が見られました。また、営農支援に向けたカントリーエレベーターの整備に向けた準備も進みました。

雇用創出の面では、2019（令和元）年10月8日に、「株式会社一路」と工場立地に関する基本協定を締結（震災後3社目）。同年11月29日には、福島イノベーション・コースト構想に基づく農林水産プロジェクトとして進めてきた棚塩産業団地に整備される「木材製品生産拠点施設・福島高度集成材製造センター」建設の安全祈願祭が執り行われました。

TOPICS

9年振りにふるさとで開催「なみえ春まつり」

復興に向けた歩みが少しずつ進む中、2019（平成31）年4月6日に開催された「なみえ春まつり」には、約1,500人が来場しました。会場となった請戸川リバーライン周辺には、なみえ焼そばなどの露店が軒を連ね、ステージでは音楽ライブ、福島県内の子どもたちが参加しているクラップスチアリーダーズによるチアダンスなどが披露されました。夜には「なみえ創成小・中学校の校歌」などに合わせて、花火約1,000発が打ち上げられました。



うららかな春を楽しむ来場者たち

2019（平成31・令和元）年

【4月】

- ・浪江町立小・中学校 合同休校式を実施

【5月】

- ・イオンリテール(株)と災害時における支援協力に関する協定を締結



- ・交流・情報発信拠点施設「(仮称) 道の駅なみえ」整備事業の起工式

【7月】

- ・イオン浪江店がオープン
- ・標葉郷野馬追祭開催

【8月】

- ・海外学習事業を実施（オーストラリア）



【8月～11月】

- ・浪江町イメージアップキャラクター「うけどん」がゆるキャラグランプリ初挑戦（全国35位・県内1位）





福島水素エネルギー研究フィールド開所式

■ CO₂フリーな浪江産水素の利活用を目指して

2020（令和2）年3月7日には、町の復興のシンボルの一つである「福島水素エネルギー研究フィールド（通称・FH2R）」が開所しました。棚塩産業団地に造られたこの施設は、世界最大級（10メガワット級）の水素製造能力を有し、持続可能なまちづくりを環境面から支えていきます。開所式には、安倍内閣総理大臣をはじめ、梶山経済産業大臣、田中復興大臣、内堀福島県知事、吉田町長などが出席。安倍内閣総理大臣からは「原発事故で大きな被害を受けた福島から、未来の水素社会に向けた新しいページが今まさに開かれようとしている。福島水素エネルギー研究フィールドは、水素社会実現につながる世界最大のイノベーション拠点となる」と挨拶がありました。町では、同施設の開所に先立ち「2050年二酸化炭素排出実質ゼロ」のゼロカーボンシティを目指すことを宣言しました。



幾世橋集合住宅

町民の復興公営住宅への入居状況は、2019（令和元）年12月31日時点で、県営および市町村営を合わせ1,504世帯2,634人の方が入居決定を受け、新たな住環境での生活をスタート。また、応急仮設住宅の入居状況は、2020（令和2）年2月29日時点で供与戸数58戸に対し、入居戸数8戸（入居者数10人）、借上型が入居戸数264戸（入居者数467人）でした。



水素の製造施設 FH2R

■ 新たな住環境での生活に向けて

一般車両の通行が制限されている県道35号（通称・山麓線）の帰還困難区域部分に、9月5日より特別通過交通制度が適用となり、通行証の所持・提示を必要としない自由通行が可能となりました。

■ JR常磐線9年振りに全線運転再開

東日本大震災と原発事故の影響で、不通となっていたJR常磐線の富岡駅-浪江駅間（20.8km）が2020（令和2）年3月14日に運転を再開し、9年振りにJR常磐線の全線がつながりました。震災後のJR常磐線の復旧状況を見ると、2015（平成27）年度から試験除染や調査を開始し、翌年3月より本格的な除染や橋梁の復旧工事などを進めてきました。双葉駅は橋上駅舎化し、東西自由通路が新設されました。夜ノ森駅の駅舎は1921（大正10）年開業当時の木造の駅舎を解体し、新設された現在は、東西を結ぶ自由通路が設置されました。また、Jヴィレッジ駅が全線開通に合わせて臨時駅から常設駅となりました。再開に合わせて、夜ノ森駅、大野駅、双葉駅の3駅周辺の一部地区の避難指示も順次解除され、双葉地域の復興が加速しました。

TOPICS

復興なみえ町十日市祭。
浪江発の新ユニットがお披露目

11月23日・24日、浪江町地域スポーツセンターにおいて「復興なみえ町十日市祭」を開催。会場には2日間で約27,000人が来場し、大いに盛り上がりました。24日には人気アイドルグループ「ももいろクローバーZ」が出演し、全国各地から集まったファンに浪江町を発信する絶好の機会となりました。当日は、ももいろクローバーZの佐々木彩夏さんより、ご当地アイドル「浪江女子発組合（JA浪江）」の結成が発表されました。



2019（平成31・令和元）年

【9月】

- ・県道35号（いわき浪江線）の特別通過交通開始

【10月】

- ・うけどんがデザインされた「ご当地ナンバー」の交付開始



- ・なみえ創成小学校・中学校・浪江にじろこども園の合同運動会
- ・(株)一路と工場立地に関する基本協定を締結
- ・浪江町水産業共同利用施設が完成（請戸漁港）
- ・浪江町住民意向調査を実施

【10月～11月】

- ・県内外で浪江町市政懇談会を実施

【11月】

- ・復興なみえ町十日市祭・大堀相馬焼「大せとまつり」開催、浪江町から元気を届けるご当地アイドル「浪江女子発組合」の結成を発表（復興なみえ町十日市祭）
- ・福島高度集材製造センターの安全祈願祭（棚塩地区）
- ・浪江町立学校校舎等検討委員会が町に答申

2020（令和2）年

【1月】

- ・あるけあるけ初日詣大会
- ・請戸漁港出初式を挙行



【3月】

- ・浪江町東日本大震災追悼式を開催（如水典礼さくらホール）
- ・福島水素エネルギー研究フィールドが開所

2020（令和2）年4月1日～2021（令和3）年3月31日

東日本大震災 および原発事故から10年 ふるさとの再生に向かって

「ふるさと浪江町」は新たなステージへ

■ 住みよいまちづくりを目指して

東日本大震災および原発事故から10年の節目の年を迎える2020（令和2）年度は、浪江町復興計画【第二次】の本格復興期の最終年度にあたり、町では持続可能なまちづくりに向けた様々な事業を展開しました。本庁舎の一部組織の見直しが図られ、企画財政課内に「定住推進係」、農林水産課内に「農業土木係」、教育委員会事務局内に「郷土文化係」をそれぞれ新設し、推進体制の強化を図りました。持続可能なまちづくりをかなえるため、約340億円の当初予算（震災当時の約7倍）をもって各種施策を展開しました。

この年、新型コロナウイルスが猛威を振るい、感染者増加に対応する緊急事態宣言が全国に発令されました。町では「浪江町新型コロナウイルス感染症対策本部」を設置し、4月13日から本庁舎および出張所等で来庁者の検温を実施するとともに、防災行政無線により感染拡大防止の注意喚起を図りました。「密閉」「密集」「密接」のいわゆる3密を避けるために、イベントなどは中止となり、自粛ムードが広がる中、5月21日には町内外の町民8,542世帯に対して、1世帯あたりマスク10枚を配付しました。

営農再開の面でも大きな動きが見られました。この年、津波被災農地の南棚塩地区において水稻を再開。田尻地区、西台地区など新たに作付けをした地区を含め、9つの地区の水稻作付面積が前年のおよそ3倍の89haとなりました。11月12日には、荻宿地区のカントリーエレベーター建設予定地で合同安全祈願祭を開催しました。完成すると、棚塩地区のもう一基と合わせて約600haの水稻の作付けに対応できるようになります。

2020（令和2）年5月31日時点の町内での事業者は、再開・新規合わせて155事業所が活動しており、新型コロナウイルス感染拡大に伴う町独自の取り組みとして、電気料金や上下水道料金等の固定経費を一定額交付するなどの支援策を採用しました。



道の駅なみえグランドオープン

■ 漁業、農業の再開が復興を後押し

2020（令和2）年4月8日、請戸漁港の新たな荷捌き施設において、9年振りとなる競りが再開されました。この日は24隻の船が出漁し、ヒラメやナメタガレイ等、約2トンを水揚げ。市場内には威勢のいい掛け声が響き渡り、仲買人が次々と魚介を競り落としました。吉田町長は「震災直後は諦めかけたが、多くの人の努力によって再開できてうれしい。港の活気で町の復興を引っ張ってほしい」と話し、試験操業から本格操業に向けて支援を進めると約束しました。



請戸漁港・請戸荷捌き施設での競りの様子

2020（令和2）年

【4月】

- ・請戸荷捌き施設で9年振りに競りが再開

【7月】

- ・閉校となる町立小・中学校の解体を前に、学校の歴史にふれる見学会開催
- ・福島県にて「福島復興祈念公園」の施設配置計画が公表《県の事業》



福島復興祈念公園イメージ図

【8月】

- ・道の駅なみえプレオープン
- ・福島ロボットテストフィールドを会場に「ロボテス見学会2020」が開催
- ・請戸住宅団地の分譲地販売が開始
- ・浪江町地域職業相談室が再開
- ・町道小熊田宮田線が開通



【9月】

- ・請戸住宅団地26戸が完成



【10月】

- ・町道215号（阿掛線）の特別通過交通が開始
- ・浪江町イメージアップキャラクター「うけどん」がゆるキャラグランプリにて全国35位・福島県内2年連続1位
- ・道の駅なみえにおいて合同感謝祭開催（イオン浪江店と共催）



■ 新しい暮らし、賑わいのある町へ

応急仮設住宅は、2002（令和2）年3月末で供与期間が終了し、同年6月1日現在の入居状況は、県内12戸、県外11戸で計23戸（特定の要件を満たすことにより、2021（令和3）年3月末まで供与期間延長）となっています。町外の復興公営住宅の入居状況は、4月1日現在、県営および市町村営合わせて1,501世帯、2,628人が、新たな住環境での生活をスタートしました。また、町内にて整備を進めてきた災害公営住宅「請戸住宅団地」の完成式が、2020（令和2）年9月29日に行われ、10月1日から順次入居が始まりました。

こうした中、中心市街地の再生と町民交流の場として整備を進めてきた「道の駅なみえ」が、2020（令和2）年8月1日にプレオープンを迎え、県内外から約4,000人の来場者が訪れました。館内では、町内で採れた新鮮な野菜や海産物をはじめ、各地の地酒、道の駅限定の商品等を販売。フードテラスでは、請戸漁港で水揚げされた新鮮なシラスを使った釜揚げシラス丼や、旬の果物を使用したスイーツなど、豊富なメニューを取り揃えています。道の駅の入り口に大きく掲げられたロゴは、「道の駅」の部分は「町の西部に連なる山々」、「なみえ」の部分は「東に見渡す限り広がる海の波」、外側を囲む半円は、





水素を燃料とした聖火トーチが町を巡る

“海から望む日の出”をイメージしています。“駅”の文字の一部は、請戸川などを遡上するサケを描いた旗を山頂に掲げたデザインとなっています。同施設は、2021（令和3）年3月にグランドオープンを迎え、町の伝統工芸品「大堀相馬焼」の展示販売ブース、酒蔵見学などができる地場産品販売施設が新たに設けられました。町の交流・情報発信拠点として復興を後押しする施設となっています。

■ スマートコミュニティを ふるさと浪江町から

町では、浜通り地域における新しいモビリティを活用したまちづくりに向けて、2021（令和3）年2月2日に連携協定を締結しました。協定を結んだのは、双葉町、南相馬市の2自治体および、日産自動車株式会社、フォアールエナジー株式会社、福島日産自動車株式会社、日産プリンス福島販売株式会社、イオン東北株式会社、日本郵便株式会社東北支社、株式会社長大、株式会社ゼンリンの全国8企業。この協定では、過疎地や復興地域持続可能なモビリティサービスを構築し、帰還・交流人口の段階的な増加に対応できるようにすることをはじめ、協定に加盟した自治体・企業の強みを活かした再生エネルギーの利活用、脱炭素社会に向けた取り組み、コミュニティの活性化などを進めていきます。町では、2月8日～20日にかけてスマートモビリティを活用した実証

実験を実施しました。町の中心部を走る巡回シャトルバスと、周辺部と中心部を結ぶ車を組み合わせ

て、人や商品の移動を行う実験で、車両はすべて電気自動車を使用。バスの乗降所は、サイネージを設置したデジタル停留所です。町で暮らす人、町を訪れる人の移動に関する課題の解決に向けた取り組みが始まっています。



■ 東京2020聖火リレー、スタート 世界とつながる浪江町

新型コロナウイルス感染拡大による影響で1年延期されていた「東京2020オリンピック」の聖火リレーが、2021（令和3）年3月25日、福島県復興のシンボル・Jヴィレッジからスタート。本大会で使用される水素トーチには、町の福島水素エネルギー研究フィールド（FH2R）で太陽光発電によって製造された水素が燃料として使用され、持続可能なまちづくりを目指す浪江町をPRする機会となりました。聖火リレー初日にあたる3月25日、3人の町民が、浪江小学校前から道の駅なみえを駆け抜け、沿道では大漁旗を掲げた町民が温かいエールを送りました。

TOPICS

ふるさとの再生を祈って
「あるけあるけ初日詣大会」

震災から10年の節目にあたる2021（令和3）年1月1日、恒例の「あるけあるけ初日詣大会」を開催しました。参加者約200人は、道の駅なみえから請戸海岸を目指して約5kmを歩き、雲間からのぞく美しい初日の出に目を細めました。このイベントは、全町避難に伴い中止していましたが、2018（平成30）年より再開しました。



ふるさとの再生への願いを新たに

TOPICS

菅内閣総理大臣が町内各所を視察

2021（令和3）年3月6日、“東日本大震災および原発事故発生から10年”を前に、菅内閣総理大臣が、浪江町をはじめ浜通り地域を視察しました。菅内閣総理大臣は、平沢復興大臣、内堀福島県知事や吉田町長の同行の下、大平山霊園を訪問。浪江町東日本大震災慰霊碑に花を供え、黙とうをささげて合掌し、犠牲者の冥福を祈りました。



2020（令和2）年

【11月】

- ・町と「東北電力ネットワーク㈱ 相双電力センター」が、大災害時における相互協力に関する協定を締結
- ・カントリーエレベーター建築工事の合同安全祈願祭を挙行



カントリーエレベーター（刈宿地区）イメージ図



カントリーエレベーター（棚塩地区）イメージ図

【12月】

- ・町内の水道水をペットボトルに詰めた「NAMIE WATER ～なみえの水～」販売開始



2021（令和3）年

【1月】

- ・あるけあるけ初日詣大会開催

【3月】

- ・津波被災地の「思い出の品展示場」が21日をもって閉鎖
- ・浪江町東日本大震災追悼式開催（浪江町地域スポーツセンター）
- ・「道の駅なみえ」グランドオープン